

CSI 委託事業 海外出張報告書

平成 21 年 4 月 16 日

所 属：金沢大学情報部情報企画課コンテンツ第一係

職 名：係員

氏 名：川井奏美

下記の通り報告いたします。

期 間	平成 20 年 11 月 16 日 ～ 平成 20 年 11 月 22 日
出張目的	(1) SPARC Digital Repositories Meeting 2008 参加 (2) National Library of Medicine、George Mason University、Columbia University への訪問
用 務 先	(1) Radisson SAS Hotel : ボルチモア【アメリカ】 (2) National Library of Medicine : ベセスダ【アメリカ】 (3) George Mason University : フェアファックス【アメリカ】 (4) Columbia University : ニューヨーク【アメリカ】
用 務	(1) 機関リポジトリに関する調査・研究の一環として SPARC Digital Repositories Meeting 2008 に参加 (2) アメリカにおける機関リポジトリへの取り組みの現状の調査、及び学生サービスについての調査
出張内容	(1) SPARC Digital Repositories Meeting 2008 参加 11月17日(月) ・ Science Commons プロジェクトの John Wilbanks 氏の基調講演で始まった。 Session 1 New Horizons Session 2 Developing Value-Added Services 上記 2 つのセッションが開かれた。リポジトリへの付加価値サービスに関して、ペンシルベニア大学の Shawn Martin 氏が機関リポジトリをバックボーンとした研究者個人のページを作るサービスについて発表し、またハワイ大学大学院の Jennifer Campbell-Meier 氏はリポジトリの普及のための広報活動の重要性についての発表をした。Session 2 では、金沢大学情報部の内島秀樹情報企画課長の発表があり、デジタルリポジトリ連合(DRF)の活動やノーベル物理学賞の益川・小林論文を機関リポジトリへ搭載した京都大学の事例など日本で行われているリポジトリ活動についての報告が行われた。 ・ 終わりに開かれたレセプションでは、Innovation Fair と銘打って各大学やプロジェクトの活動を 2 分間でプレゼンするセッションが設けられた。ここでは、筑波大学の金藤伴成氏が千葉・神戸・東京工業大学と共同構築している学協会著作権ポリシーデータベース(SCPJ)を紹介した。 11月18日(火) ・ Session 3 Policy Environment Session 4 Campus Publishing Strategies 2 日目は上記 2 つのセッションが開かれた。2 日目は主に各機関・地域でのリポジトリへの取り組み・現状が次々と紹介された。Session 3 では、千葉大学の土屋俊教授が 4 年前に行った自身の講演を引用しながら、その後の 4 年間での日本における進展を紹介した。 ・ 午後は Marketing Practicum が行われた。研究分野ごとにテーブルが分かれ、その分野の架空の研究者へどのようにリポジトリをプロモーションしていくかを討論した。最後には討論の結果をテーブルごとに発表した。

出張内容

- ・会議の最後は、David Shulenburger 氏の基調講演で締めくくられた。
- (2) National Library of Medicine 訪問

11月19日(水)

- ・午前中にワシントン D.C.へ移動し、午後にベセスダにある National Library of Medicine を訪問した。
- ・まず施設の見学、続いて以下の点についてスライドを交えながら説明していただいた。
 - PubMed Central について
PubMed Central の定義は「Digital Archive of life science journals」であり、フルテキストへのフリーなアクセスを実現。PubMed Central への登録には、出版社が参加を申し出てバックナンバーの登録の有無や embargo*4)の期間など基本的な合意を交わす必要がある。
 - パブリックアクセス方針について
2005年5月に助成金で行われた研究については「voluntary」つまり任意での登録を促す方針が決まったが、あまり集まらなかった。その後2007年1月にエルゼビア社から、7月に ACS から著者版の提供を受け、2008年4月に登録が義務化されたこともあり、飛躍的に登録数が増加し、現在に至っている。
 - NLM が考えるオープンアクセスとパブリックアクセスの違い
オープンアクセスは使用に制約がなく自由であり、公表後すぐに利用可能なものに対して使用する言葉であり、それに対してパブリックアクセスは、一定の決まりの下での使用が原則となり、公表後すぐに使用できるわけではなく1年間の embargo が設けられる。

(3) George Mason University 訪問

11月20日(木)

- ・午前に George Mason University を訪問。
- ・Fairfax キャンパスにある Johnson Center Library という図書館を訪問した。この図書館は Johnson Center という複合施設の中にあり、図書館のほか映画館、フードコート、ブックストア、銀行などがある。
- ・Johnson Center Library 見学後、案内して下さった方たちとランチを取った。SPARC Digital Repositories Meeting 2008 の初日最後の Innovation Fair で発表された Shane Beers 氏も参加し、情報交換を行った。
- ・午後にニューヨークへ移動。

(4) Columbia University 訪問

11月21日(金)

- ・午後から、Columbia University を訪問、Butler Library の見学。
- ・機関リポジトリ担当者の Sarah Holsted 氏から Columbia University における機関リポジトリの指針、目標や広報活動についてお話をうかがう。また、著作権について教員に理解してもらうための活動を行っている Copyright Officer の Kenneth D. Crews 氏の話がうかがった。
- ・その後、学生サービス担当の方に学生サービスをどのように展開しているか具体的に説明いただいた。
- ・今回訪問をコーディネートしていただいた C.V. Starr East Asian Library の野口幸生氏の案内のもと、C.V. Starr East Asian Library を見学。

出張成果	<p>(1) SPARC Digital Repositories Meeting 2008 アメリカ各機関のリポジトリへの取り組みの現状を知ることができた。アメリカの現状は日本と似通っているところが多くあり、今後の情報交換の重要性を改めて感じた。</p> <p>(2) National Library of Medicine 訪問 2007年12月に制定されたパブリックアクセス方針について話をうかがい、実際に効果が上がっているとの説明を受け、法律制定の有用性を確認することができた。</p> <p>(3) George Mason University 訪問 学生サービスやラーニング・コモンズ、複合施設内にある図書館のメリット、デメリットなどについて話をうかがい、今後の学生サービスのあり方について参考となる情報をいただいた。</p> <p>(4) Columbia University 訪問 リポジトリ担当の方や著作権業務担当の方に話をうかがい、改めて、専任職員の必要性や効率的な業務の分担化などの必要性を感じた。今回うかがった話は、今後のリポジトリ活動において非常に参考となると考えられる。</p>

- 【注】
- ◇ 会議、学会等に出席の場合は、講演、座長などの役割、会議概要などを明記する。
 - ◇ 聴講のみの場合には、会議における研究動向、企業や大学の動向、注目すべき発表、日本からの参加者など、会議内容に関する、より詳細な内容を記入する（スペースが足りない場合は、適宜、ページを追加）。